

控え選手の葛藤体験プロセス

～本学硬式野球部を対象として～

小林 拳大 (競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース)

指導教員 豊田 則成

キーワード：控え選手，葛藤，野球

1. 緒言

本研究では，控え選手は「自分の取り組みをどのように語るのか」というリサーチクエスチョン(以下 RQ と称す)を設定し，質的にアプローチを行った．そこから，発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした．

2. 研究方法

インフォーマント (調査対象者：以下 Inf. と称す.) を，本学硬式野球部に所属する控え選手 8 名とし，一人あたり約 1 時間程度の 1 対 1 形式の半構造化インタビューを実施した．分析方法については，質的研究法の代表的手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下 GTA) を用いて行った．

3. 結果と考察

本研究では，上記の RQ に対し，質的

にアプローチをした結果，「控え選手は，周囲に認めてもらおうと取り組むが，試合に出られない事に直面し，認めてもらえない経験をする．そのことによって，自分の弱さを認めようとする自己と，自分の弱さを認められない自己の間で葛藤し，自分を見つめようとする」と，自分が見えないことの間で葛藤するという葛藤体験プロセスに入る．そして，そのプロセスの中で，自分を見つめることによって，見えなかったことが見えるようになり，前向きに取り組んでいくとして語る」という仮説的知見を導き出した．

4. まとめ

控え選手は葛藤を経験するからこそ心理的成熟ができると考える．すなわち，控え選手が心理的成熟をするためには，葛藤をしなければならない．

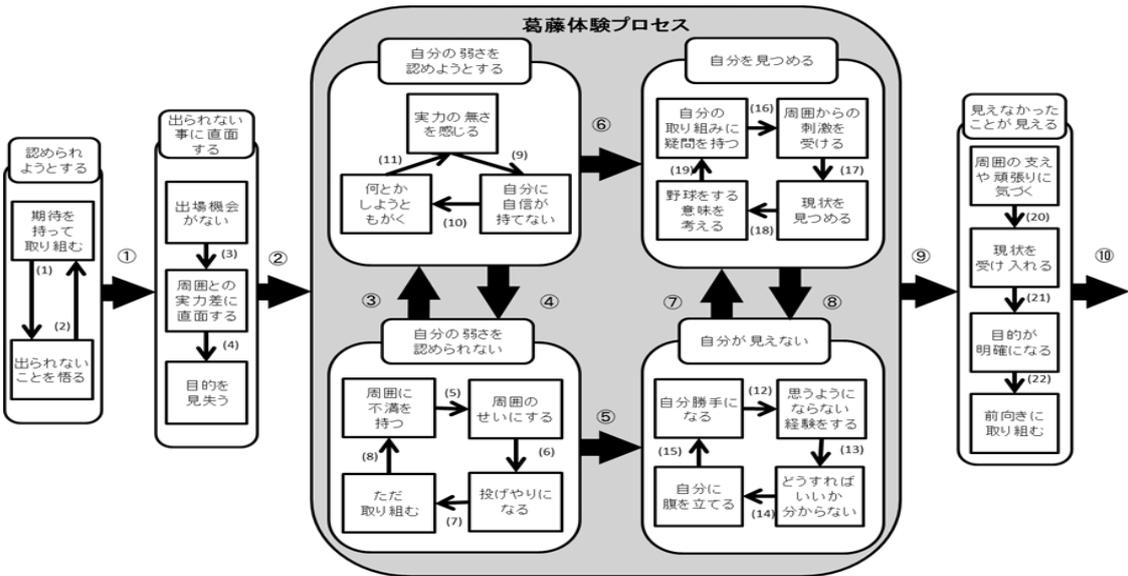


Fig. 1: 控え選手の葛藤メカニズム